

## ガレ語の示差的 A 標示\*

吉田樹生 (東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC1)

shige.mountain.linguistics@gmail.com

## 1. はじめに

- ヒマラヤ地域のチベット・ビルマ諸語はしばしば随意的能格標示を示すことが知られている (LaPolla 1995; Chelliah & Hyslop 2011)
  - 能格標示が随意的である度合いや標示の有無の条件となる要因は言語ごとに異なる
    - 例: Kurtöp 語 (Hyslop 2010) では語用論的要因により S にまで能格標示が出てくる
- ガレ語は、ネパール中央部のゴルカ郡で話されるチベット・ビルマ語派タマン諸語 (van Driem 2011) の言語であり、他のヒマラヤ地域チベット・ビルマ諸語と同様に随意的能格表示を示す
  - S, P 項は常に形態的標示がなされない ((3), (4)) のに対して、A 項は能格標示形式 =te で標示されうる ((1), (2))

(1)  $\eta\Lambda^{33}$   $k\Lambda\eta^{25}$   $tsi^{33}j\Lambda^{22}$  $\eta\Lambda^{33}$   $k\Lambda\eta^{25}$   $ts\Lambda^{33}-j\Lambda$ 

1SG food eat-NPST

‘I will eat rice.’ (Elicited)

(2)  $\etaete^{33}$   $k\Lambda\eta^{25}$   $tsi^{33}j\Lambda^{22}$  $\etae^{33}=te$   $k\Lambda\eta^{25}$   $ts\Lambda^{33}-j\Lambda^{22}$ 

1SG=ERG food eat-NPST

‘I will eat rice.’ (Elicited)

(3)  $\eta\Lambda^{33}$   $nane^{21}$   $pri^{33}j\Lambda^{22}$  $\eta\Lambda^{33}$   $na^{21}=ne$   $pr\Lambda^{33}-j\Lambda^{22}$ 

1SG forest=LOC go-NPST

‘I will go to the forest.’ (Elicited)

(4) \* $\etaete^{33}$   $nane^{21}$   $pri^{33}j\Lambda^{22}$  $\etae^{33}=te$   $na^{21}=ne$   $pr\Lambda^{33}-j\Lambda^{22}$ 

1sg=ERG forest=LOC go-NPST

‘I will go to the forest.’ (Elicited)

- 本発表は、発表者がゴルカ郡バルバック村で行った聞き取り調査と書き起こし資料に基づいて、どのような場合に能格標示が義務的であるかを記述する
  - 調査の結果、以下の場合には他動詞主語への能格標示が義務的であることがわかった
    - (あ) アスペクトが完結相である場合 (2.1 節)
    - (い) 他動詞主語が非人間である場合 (2.2 節)
    - (う) 目的語が人間である場合 (2.3 節)
    - (え) 目的語の項の状態変化が含意される場合 (2.4 節)
    - (お) 他動詞主語が対比的焦点を持つ場合 (2.5 節)
  - これらの能格標示を条件付ける要因には、項の特性によるもの (い、う、お) や述語の特性によるもの (あ)、項と述語の関係性によるもの (え) など異なるタイプが含まれる
  - ガレ語の示差的 A 標示は義務的である場合と随意的である場合がある分裂・流動タイプ
  - ガレ語の能格標示は、示差的項標示の二つの機能である弁別機能と同定機能 (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018) の両方を担いうる

\*本稿の内容について以下の方々からコメントをいただいた: 石川さくら、佐近優太、周杜海、鈴木唯、谷川みずき、長屋尚典、林真衣、松瀬育子、水野庄吾 (敬称略)。本発表の調査は 2023 年 10 月 16 日から 2024 年 5 月 31 日に、JSPS 若手研究者海外挑戦プログラムに採用され、ネパール・ゴルカ郡バルバック村で行われたものである。私を受け入れて言語を教えてくれたバルバック村の方々に感謝を表す。また本研究は JSPS 科研費 JP23KJ0748 の助成を受けたものである。

- ヒマラヤ地域において、常に A 項にのみ能格標示が現れるガレ語は特徴的
- 本稿の構成は以下の通り：
  - 第 2 節: 能格標示が義務的である 5 つの場合を順に記述する
  - 第 3 節: 談話資料における能格標示の分布を用いて、本稿の記述の妥当性を検証する
  - 第 4 節: 示差的 A 標示が担う機能やヒマラヤ地域におけるガレ語の項標示の特徴を議論
  - 第 5 節: 本稿をまとめる

## 2. 能格標示が義務的であるとき

- 本節では =te の標示が義務的になる条件を記述する。項と述語の特性の両方が含まれる。

### 2.1. アスペクト

- 完結相では =te の標示が義務的になる

(5) ηete<sup>33</sup> lila<sup>25</sup> kuqe<sup>55</sup> lom<sup>22</sup>kΛte  
 ηe<sup>33</sup>=te lila<sup>25</sup> kuqe<sup>55</sup> lom<sup>22</sup>-kΛ-te  
 1SG-ERG Ghale language learn-PFV-PST  
 ‘I learned the Ghale language.’ (Elicited)

(6) \*ηΛ<sup>33</sup>lila<sup>25</sup> kuqe<sup>55</sup> lom<sup>22</sup>-kΛ-te

- それに対して非完結相では =te の標示は義務的ではない

(7) nΛte<sup>21</sup> phon<sup>22</sup> tsje<sup>55</sup> bilΛ<sup>21</sup>ne ηΛ<sup>33</sup> kΛη<sup>25</sup> tse<sup>21</sup>nΛ hΛ̃<sup>55</sup>  
 nΛ<sup>21</sup>=te phon<sup>22</sup> tsji<sup>55</sup>-e bilΛ<sup>21</sup>=ne ηΛ<sup>33</sup> kΛη<sup>25</sup> tse<sup>33</sup>-nΛ hΛ̃<sup>55</sup>  
 2SG-ERGphone do-NMLZ time=LOC 1SG food eat-PROG COP.PST  
 ‘When you called me, I was eating food.’ (Elicited)

### 2.2. 非人間の他動詞主語

- 非人間の他動詞主語 A は義務的に =te で標示される

(8) phja<sup>55</sup>=te kita<sup>22</sup>=te luη<sup>55</sup> kjar<sup>21</sup>-pi<sup>55</sup>-ja<sup>22</sup>  
 above=from cow=ERG stone roll-MOD-NPST  
 ‘The cow will roll the stone from above.’ (Elicited)

(9) ΛnΛ<sup>25</sup>wΛ tsutsu<sup>21</sup>wΛ ηΛ<sup>55</sup> tɛl<sup>21</sup>lΛte tsutsu<sup>21</sup>wΛ owΛte<sup>33</sup> ηΛ<sup>55</sup> tse<sup>21</sup>nΛ hΛη<sup>25</sup>  
 Λne<sup>25</sup>=wΛ tsutsu<sup>21</sup>=wΛ ηΛ<sup>55</sup> tɛl<sup>21</sup>-rΛ-te tsutsu<sup>21</sup>=wΛ owΛ<sup>33</sup>=te ηΛ<sup>55</sup> tse<sup>33</sup>-nΛ hΛη<sup>25</sup>  
 here=EMP now=EMP fish fall-VEN-PST now=EMP jackal=ERG fish eat-PROG COP.NPST  
 ‘Now, the fish fell down here. Now the jackal is eating the fish.’ (The Jackal and the Crow)

### 2.3. 人間の目的語

- 目的語 P が人間である場合には、A の有生性に関わらず A は =te で標示される

(10) ηe<sup>33</sup>=te nΛ<sup>21</sup> sje<sup>33</sup> hΛη<sup>25</sup> nΛ<sup>21</sup> kuΛrΛ<sup>22</sup>-bΛ<sup>33</sup> mi<sup>55</sup> ja<sup>33</sup>-te  
 1SG-ERG2SG know COP.NPST 2SG how-NMLZ person say-PST  
 ‘I know you, what kind of person you are.’ (Elicited)

(11) \*ŋΛ<sup>33</sup> nΛ<sup>21</sup> sje<sup>33</sup> hΛŋ<sup>25</sup> nΛ<sup>21</sup> kuΛrΛ<sup>22</sup>=bΛ mi<sup>55</sup> jΛ<sup>33</sup>-te

(12) ne<sup>25</sup> nΛp<sup>55</sup>=te ŋe<sup>33</sup>=te nΛ<sup>21</sup> lΛŋ<sup>55</sup>-ri-jΛ<sup>22</sup>  
tomorrow morning=in 1SG-ERG 2SG wake\_up-VEN-NPST  
'I will come and wake you up tomorrow morning.' (Elicited)

(13) \*ne<sup>33</sup> nΛp<sup>55</sup>=te ŋΛ<sup>33</sup> nΛ<sup>21</sup> lΛŋ<sup>55</sup>-ri-jΛ<sup>22</sup>

## 2.4. 有界な状態変化の含意される目的語

- 述語の事象意味論によって目的語の有界な状態変化が含意される場合には、他動詞主語 A に =te の標示が義務的である
  - ガレ語の間接的使役構文 V-la<sup>33</sup> tsji<sup>55</sup> においては、目的語が自動詞語根 V の表す状態に到達することが含意される
  - このような場合には、A 項の =te による標示は義務的である
  - 以下の例文は状態変化の完了が含意される場合とされない場合の、A 項の標示の義務性の違いを示している

(14) ŋe<sup>33</sup>=te kola<sup>33</sup> khΛr<sup>22</sup>-la<sup>33</sup> tsji<sup>55</sup>-kjΛ<sup>22</sup>  
1SG=ERG clothes dry-ADV do-NPST  
'I will make the clothes dry.' (Elicited)

(15) \*ŋΛ<sup>33</sup> kola<sup>33</sup> khΛr<sup>22</sup>-la<sup>33</sup> tsji<sup>55</sup>-kjΛ<sup>22</sup>

(16) ŋΛ<sup>33</sup> kola<sup>33</sup> khΛr<sup>55</sup> tsji<sup>55</sup>-kjΛ<sup>22</sup>  
1SG clothes dry do-NPST  
'I will hang the clothes out.' (Elicited)

## 2.5. 対比的焦点により引き起こされる標示

- これまでに述べた条件以外では、節を構成する名詞句、動詞句が同一であっても、A への標示がある場合とない場合が可能である
- このとき、A への標示の有無は対比的焦点によって条件付けられる
  - 以下の例の返答では、私が人のグループの中で対比されているため、A 項の =te による標示は必要となっていると考えられる

(17) [There are many dishes to prepare, and people are discussing who will cook the eggs.]

su<sup>22</sup>=te kΛ<sup>55</sup>phum<sup>33</sup> tshu<sup>55</sup>-jΛ<sup>22</sup>? ŋe<sup>33</sup>=te kΛ<sup>55</sup>phum<sup>33</sup> tshu<sup>55</sup>-jΛ<sup>22</sup>  
who=ERG egg cook-NPST 1SG=ERG egg cook-NPST  
'Who will cook the egg?' 'I will cook the egg.' (Elicited)

## 3. 検証

- この節では前節で記述した能格標示の条件の妥当性を談話資料に基づいて検討する
  - 前節での記述は主に聞き取り調査に基づくものであった
  - 談話資料は宗教儀式のビデオを見ながらリアルタイムで解説していただいたもの<sup>1</sup>
    - リアルタイムで話しているため非完結相が多く出現する

<sup>1</sup> <https://youtu.be/OJErwTS4xo?si=Ap9-T3I0BofakrU5>

- 明示的な A 項が現れる節を抜き出し、=te の標示の有無、動詞のアスペクト、A および P の有生性、動詞の意味を確認する
- 調査した談話資料には 383 の節が含まれ、そのうち明示的な A 項が現れる節は 69 個あった
  - 69 節のうち A 項が =te で標示されていたのは 51 節で、されていなかったのは 18 節あった<sup>2</sup>
- 能格標示がなかった 18 節のうち、2 節で述べた =te が必須となる条件を満たすものはなかった
  - 全ての節が、未完了アスペクト、人間の A、無生の P を持っていた
  - 動詞については *le*<sup>55</sup> ‘look’, *tshjwe*<sup>55</sup> ‘read, chant’ がそれぞれ 6 例、*ple*<sup>55</sup> ‘carry’ が 2 例、*kin*<sup>55</sup> ‘take’, *hwe2l* ‘wear’, *tʂa*<sup>33</sup> ‘eat’, *pha*<sup>55</sup> ‘untie’ がそれぞれ 1 例であった
    - これらの動詞はいずれも目的語の状態変化を含意しない
- 談話資料のデータから、記述の妥当性がある程度示された

#### 4. 議論

- ガレ語の能格標示は示差的項標示 (DAM) の一例である
- 以下では、DAM の要因のタイプ、義務性、機能、そしてガレ語の特色について議論する

##### 4.1. 要因のタイプ

- 本稿で議論した能格標示の有無を条件づける要因は、異なるタイプに属する
  - 本稿では、アスペクト、有生性、状態変化、情報構造の四つの要因を議論した
  - Witzlack-Makarevich & Seržant (2018) は DAM を、述語の形式が異なるものと述語の形式が同一であるもの二つのタイプに大別する
  - 本稿で議論した四つの要因のうちアスペクトは述語の形式が異なり、述語が引き起こす DAM であり、有生性、状態変化、情報構造の要因では項の形式は同一である
  - Witzlack-Makarevich & Seržant (2018) は項の形式が同一な場合にも、単一の項の特性に基づくもの、複数項の関係 (シナリオ) に基づくもの、事象意味論に基づくものがあるという
  - ガレ語の示差的 A 標示における要因もこの三つに分類される
    - 対比的焦点の要因は単一の項の特性に基づくものである
    - 有生性の要因は A, P 両方の項の特性が関係するためシナリオに基づくものである
    - 状態変化は事象意味論に基づくものである
  - このようにガレ語の示差的 A 標示を条件づける要因は多様である

##### 4.2. DAM の義務性

- これらの要因に条件づけられるガレ語の示差的 A 標示全体は、分裂・流動タイプの DAM (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018) であると位置付けられる
  - Witzlack-Makarevich & Seržant (2018) は標示の義務性によって、以下の三つの DAM の類型を提案した
    - (i) 義務的 = 分裂タイプ (split)
    - (ii) 義務的-随意的 = 分裂・流動タイプ (split-fluid)
    - (iii) 随意的 = 流動タイプ (fluid) (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018: 28)

<sup>2</sup>能格標示のない文: [https://drive.google.com/file/d/1U-oWf-M9Z\\_lutKvJMuR202kM4tvAajgv/view?usp=drive\\_link](https://drive.google.com/file/d/1U-oWf-M9Z_lutKvJMuR202kM4tvAajgv/view?usp=drive_link)

- McGregor (2009) は能格標示の随意性を以下のように定義する:  
誰が誰に何をしたかの解釈を変えることなく、A 項が標示される場合とされない場合がある状況のこと
- この意味では、アスペクト、有生性、状態変化によって引き起こされる能格標示は義務的である
  - 項や述語がこれらの特性を持つ場合、必ず =te の標示がある
- それに対し、情報構造によって引き起こされる能格標示は随意的である
  - 情報構造は誰が誰に何をしたかの解釈に関わらずに、=te の標示を引き起こす
- ガレ語の DAM は要因によって義務的である場合と随意的である場合がある
- そのため、ガレ語の示差的 A 標示は分裂・流動タイプに属する DAM であると言える

#### 4.3. DAM の機能

- DAM には、弁別 (distinguishing) 機能と同定 (identifying) 機能の二つの機能があるとされる (Witzlack-Makarevich & Seržant 2018)
  - 弁別機能とは、複数の項をもつ節において項を区別する機能
  - 同定機能とは、節内の項間の関係とは独立に、項自体の様々な特性を標示する機能
  - これらは主に、項の特性により引き起こされる DAM について議論される
- ガレ語の示差的 A 標示はこれら二つの機能を持っていると考えられる
  - まず、有生性により引き起こされる場合の能格標示は弁別機能を担っていると考えられる
    - A が非人間である場合または、P が人間である場合に A に能格標示が起こる
    - これら二つの場合はプロトタイプの他動詞節から逸脱した場合である
    - このような場合の能格標示は、非プロトタイプの関係において A を P から区別する機能、すなわち弁別機能を担っていると考えられる
  - 状態変化が含意される P がある場合に引き起こされる能格標示は同定機能を担っている
    - 有界的で状態変化が完了することを含意する述語は受影性が最も高い (Beavers 2011)
    - P の受影性が高い他動詞節は他動性の高い節である (Hopper & Thompson 1980)
    - この場合の A 標示の機能は、A と P が意味的に最大限に対立した他動性の高い他動詞節 (Næss 2006) において、A の特性を標示すること
    - これは、項の弁別と独立に、項自体の特性を標示する同定機能の事例である
- このようにガレ語の示差的 A 標示は機能の観点からも一枚岩ではない

#### 4.4. 周辺言語から見たガレ語 DAM の特徴

- 示差的 A 標示はヒマラヤ地域のチベット・ビルマ諸語においてはそれほど珍しいものではない (LaPolla 1995; Chelliah & Hyslop 2011)
- しかし、ガレ語においては能格標示の語用論的用法の範囲に特徴がある
  - ガレ語では、対比的焦点を示す能格標示は常に A 項に対して起こる
    - 対比的焦点を担っていたとしても、S 項に対して能格 =te の標示がなされることはない
  - それに対して、この地域のチベット・ビルマ諸語では、語用論的文脈などによって S 項に対しても能格標示がなされることがしばしばある

- 例えば、ガレ語と系統的に比較的近く、同じネパールで話されるタマン語においても、意志性の高い自動詞節の S 項は能格 =se で標示されることがある (Owen-Smith 2015)
- このように、能格標示が A 項という文法役割を超えては起こらないということは、ガレ語の示差的 A 標示の特徴の一つである

## 5. まとめ

- 本発表はガレ語の示差的 A 標示を記述し、その類型論的位置付けや地域的特徴を議論した
  - まず聞き取り調査に基づいたデータから、アスペクトが完結相である場合、他動詞主語が非人間である場合、目的語が人間である場合、目的語の項の状態変化が含意される場合には、他動詞主語への能格標示が義務的であることを述べた
    - これ以外の場合には、標示の有無に情報構造などの要因が影響する
  - 次に、談話資料に基づいて、この記述の妥当性を確認した
  - そしてガレ語の示差的 A 標示について、類型論的位置付けや地域的特徴を議論した
    - ガレ語の示差的 A 標示に関わる要因は様々なタイプに属する
    - 要因によって、A 標示が義務的な場合と随意的な場合がある分裂・流動タイプ
    - ガレ語示差的 A 標示は、場合によって弁別機能と同定機能のどちらも担いうる
    - ヒマラヤ地域において、常に A 項にのみ能格標示が現れるのはガレ語の特徴

## 参考文献

- Beavers, John. 2011. On affectedness. *Natural Language & Linguistic Theory* 29(2). 335–370.
- Chelliah, Shobhana L. & Gwendolyn Hyslop. 2011. Introduction to special issue on optional case marking in Tibeto-Burman. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 34(2). 1–7.
- Driem, George van. 2011. Tibeto-Burman subgroups and historical grammar. *Himalayan Linguistics* 10(1). 31–39.
- Hopper, Paul J. & Sandra A. Thompson. 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56(2). 251–299.
- Hyslop, Gwendolyn. 2010. Kurtop case: The pragmatic ergative and beyond. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 33(1). 1–40.
- LaPolla, Randy. 1995. Ergative marking in Tibeto-Burman. In Yoshio Nishi, James A. Matisoff & Yasuhiko Nagano (eds.), *New Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax* (Senri Ethnological Studies), vol. 41, 189–228. Osaka: National Museum of Ethnology.
- McGregor, William B. 2009. Typology of Ergativity. *Language and Linguistics Compass* 3(1). 480–508. <https://doi.org/10.1111/j.1749-818X.2008.00118.x>.
- Næss, Åshild. 2006. Case semantics and the agent-patient opposition. In Leonid Kulikov, Andrei L. Malchukov & Peter De Swart (eds.), *Case, valency and transitivity*, 309–327. Amsterdam: John Benjamins.
- Owen-Smith, Thomas. 2015. *Grammatical relations in Tamang, a Tibeto-Burman language of Nepal*. SOAS University of London PhD Thesis.
- Witzlack-Makarevich, Alena & Ilja A. Seržant. 2018. Differential argument marking: Patterns of variation. In Ilja A. Seržant & Alena Witzlack-Makarevich (eds.), *Diachrony of differential argument marking*, vol. 19, 1–34. Berlin: Language Science Press.